

第145号

会長挨拶
三河教育研究会役員
学校自慢（西尾支部）
支部トピックス（北設支部）
教室の窓から（豊川支部）
研究校紹介（豊田支部）
定期総会 報告
定期総会 教育講演会
本部事業
教育随想

教育





「この子のため」勉める

誇り高き三河教育の継承を

三河教育研究会 会長 夏目 貴司

山滴る五月二十一日、関係多くのご来賓のご臨席を賜り、令和七年度三河教育研究会定期総会を盛会裏に終えることができました。心より御礼申し上げます。

昭和三十六年五月に発足した三河教育研究会は、本年六十五年目を迎えます。この間、多くの先輩方のご尽力により、三河小中学校長会、愛知教育文化振興会との連携のもとで確かな実績と伝統が築かれ、今日まで引き継がれてきました。

三河の風土を背景とした三教研という組織そのものが、三河教師にとっての大きな「よき先輩」であり、その懐に飛び込み、学ぶ機会を得られる私たちは、「熱き後輩」でありたいと思います。

私たち教員の本分でもある「学び続ける」姿を表す「勉める」意識、研修・自己研鑽を怠らない姿勢を大切にし、自身を高めていくのはなぜか。そこには、「目の前のこの子に、授業を通して成長してほしい」と願う、はじめに子どもありき、この子のために、という確かな起点があ

ります。その一点に、三河の先輩方、仲間たちは熱い思いで臨み、工夫を凝らし、具体的に丁寧な営みを続けてきました。

そんな「教え」の一端を紐解くと、「まづ子どもをとらえる」「子どものよさ、躰き、真意を感じ取る」営みが第一に挙げられます。「授業日記に目を通し続ける」ことで、子どもがしっかりと見えてくる」という先輩の助言。また、ある仲間、「子どもの知りたい、こうなりたい思いを集める」カードを使った取組。これらに刺激を受け、若き日の私も、授業づくりにも挑んだものでした。しかし、思いが空回りをし、考えあぐね、なかなか「道」を定められずにいた時、光を照らし、「道筋」を示してくれたのは、やはり、子どもの声、つぶやき、表情、動きであり、高まり来る追究意欲、熱量でした。

子どもへの反応、答えを受け止め切れずいた若き教師の失敗を包み込んでくれたのも、三教研を中心とする、教科研究の仲間、先輩方でした。教科テーマの上辺

だけをなぞっても決してうまくいかない時、「授業で子どもを育てる」という信念をもって、丹念な記録でその変容を追い、深く考察し、その子を活かす「教師の出」につなげる、その大切さを教えていただきました。

また、こんな「教え」もありました。子どもたちの追究を活かし、「かわわり合い」「学び合う」授業づくりのカギは、毎時間の「座席表」でした。教師が「かわらせる」のではなく、子どもが確かな足場をもち「かわわり合い」たいくなる「発問、指名順はどうあるべきか、吟味しながら作戦を練る時、「ゆさぶり」「問」「子どもに返す時間」を構想する小さな研修も、私たちの大きな力につながりました。

それらの「教え」のもと、技を磨き合い、学び合う、発信・交流の機会も、三教研の組織が担う「研鑽の場」にあふれています。やがてその営みに参画し、指導・助言の立場を学び、若手・後進の育成に携わり、世代が交流する、その繰り

返しの中で、三河教育のよき伝統が引き継がれていきます。

隣の神宮が二十一年に一度の遷宮を行う時、宮大工は人生に三度それに携わることで、伝統が受け継がれると言います。しかし、実は、その二十年の間には、社の造営だけでなく、新宮で使われる器、お道具を作ることや、その材料の木材の切り出しなどに、古式に則った数えきれない職人の技が継承され続けています。

私たち教師は、壮大な社や精緻な器を作ることも負けない、すばらしい未来を創造する子どもを育てる営みに関わることができません。その道を愚直に歩み続ける時、三教研の仲間がともにあることが、大きな支えになるはずで

誰もが知る『アンパンマン』の主題歌には、「何のために生まれて、何をして生きるのか」という一節があります。「教師という人生」を選び歩んできた私たちは、この子のため「勉める」思いを大切にし、誇り高き三河教育の継承を担う、一人一人でありたいと願います。

「三河のすべての子どもに質の高い教育を保証する」という、本会発足当時の先輩方の熱き思いを受け継ぎ、高め、後輩につなぐため自分に何ができるのか、それぞれの立場での研鑽のあり方を考え、実践していける私たちでありたいと思います。

一年間、どうぞよろしく申し上げます。

令和七年度 三河教育研究会役員

会長 北設東栄中 夏目貴司
副会長 豊田逢妻中 吉野薫

顧問 岡崎甲山中 加藤嘉一
西尾東部中 中村賢司
北設東栄小 多田桂
豊田美里中 小山真司
田原中 山上高弘
みよし北中 岡本信一郎
安城明和小 浅倉幸代
愛教大附属岡崎小 清水孝治
愛教大附属岡崎中 松岡史憲
愛教大附属特別支援 村井正照
愛教大附属岡崎小 木村英勝
愛教大附属特別支援 小林克久
愛教大附属岡崎中 岡田裕之
西尾一色中 横地喜之
豊橋花田小 岩竹伸治
愛教大附属岡崎小 杉山貴哉

幹事

庶務

会計

◆評議員 (部会長)

国語 新城庭野小 中嶋孝佳
社会 安城二本木小 松永博司
算数 蒲郡西浦小 宇野晶由

理科 新城小 石原清史
生活科 岡崎豊富小 加藤鶴貴
音楽 岡崎矢作北小 細井真樹
造形 岡崎竜海中 安藤真樹
保健体育 新城東陽小 白井稔也
技術・家庭 蒲郡大塚中 多田敦
英語 (外国語活動) 豊田挙母小 瀬古幸弘

(各種研究委員会)

学習情報 岡崎形埜小 内田雅之
学校図書館 豊田敷島小 川原千恵子
統計教育 岡崎小豆坂小 塚谷千保
生徒指導 豊田飯野小 大村斎人
へき地教育 北設豊根小 杉野文隆

(支部長)

豊橋 牛川小 鈴木一真
豊川 八南小 鈴木智晴
蒲郡 塩津小 森卓也
新城 黄柳川小 夏目久代
北設 田口小 後藤克史
岡崎 城南小 小嶋克久
碧南 棚尾小 相羽孝彦
刈谷 富士松中 相羽孝彦
豊田 清水小 若山敏美
安城 三河安城小 濱田孝之
西尾 平坂中 齋藤茂樹

◆常任委員

総務委員会 委員長 蒲郡 浦郡南部小 遠山祐幸
副委員長 愛教大 附属岡崎小 清水孝治
委員 安城 安城北部小 奥川正規
西尾 福地北部小 河井恭子
豊川 豊川小 鈴木英勝
愛教大 附属岡崎小 木村英哉
愛教大 附属岡崎小 杉山貴哉
広報委員会 委員長 新城 東郷中 鈴木則明
副委員長 愛教大 附属特別支援 村井正照
委員 蒲郡 大塚小 大須賀繁弥
岡崎 山中小 鈴木巨裕
幸田 坂崎小 小野良琢也
愛教大 附属特別支援 岡田裕之
愛教大 附属特別支援 星野恭彦
調査委員会 委員長 豊田 逢妻中 吉野薫
副委員長 豊田 末野原中 平井千夏
委員 愛教大 附属岡崎中 松岡史憲
委員 豊田 追分小 鈴木秀和
委員 刈谷 東刈谷小 柴田満彦
委員 愛教大 附属岡崎中 小林茂雄
委員 愛教大 附属岡崎中 河合貴宝



ゲンジボタルで 地域とつながる

西尾市立室場小学校

本校は、本年度創立一五二年目を迎えた歴史ある学校です。南東に茶臼山がそびえ、その麓には須美川が流れる自然豊かな土地で、心温かな地域の方々と共に歩んできました。

地域の方々と活動の一つに平原ゲンジボタルの里保存会と連携して平成九年度から始まった「ゲンジボタルの人工飼育」があります。学校敷地内にある「ゲ



「ホタル祭り」での6年生によるホタルガイド

ンちゃんハウス」内で、室場ホタルクラブに所属している子どもたちが、幼虫の世話をしています。

六月に成虫が飛び始めるころから活動が始まります。成虫を採取し、ゲンちゃんハウス内で卵を産ませます。幼虫が孵ったら、水盤に幼虫を移します。幼虫の餌は、巻貝の一種である「カワニナ」です。子どもたちは、カワニナを採取し水盤の中に補充したり、カワニナのフンを取り除いたり、水を補充したりと、毎日活動を続け、幼虫を大きく育てます。そして、三月末に育った幼虫を放流に向けて水盤から取り出します。

四月に幼虫を「平原ゲンジボタルの里」で放流します。放流後は、六年生がホタルガイドの準備をします。ホタルガイドは、六月に平原ゲンジボタルの里で開催される「ホタル祭り」において、来場者に対して行うもので、平成十一年度から始まりました。ゲンジボタルの生態、平原ゲンジボタルの里の歴史、ゲンジボタルの人工飼育などについて、多面的に調べたことを発表します。

令和三年度には、室場小キャラクター「ホタルん」も誕生しました。ゲンジボタルは、子どもたちと地域をつなぐかけがえのない存在となっています。



(文責・野村 佳代)

支部 トピックス

子どもとじっくり 向き合う環境づくり

北設支部

平成元年に三十校あった北設楽郡の小中学校は、現在九校です。教職員数も激減し、北設楽郡教職員会の組織の在り方、適切な研修機会の確保が大きな課題となりました。これらを検討した結果として、令和三年度に組織を再編しましたが、その当時の趣意書には、次のような一文が残されています。

力量向上のためには当然研修が必要であり、研修は教師の義務でもある。しかしながら、研修のための組織運営、指導案や発表原稿作成、紀要執筆等に多くの労力を注ぎ込むことによって、最も大切な、子どもと向き合う教育活動そのものに力を発揮できなくなっているとしたら、本末転倒である。そこで、無理・無駄のない、効率的な研修ができるよう、本会等に関わる組織編成や運営、活動内容を見直していく必要があると考える。これらを踏まえ、現在は、次の指針に基づき研修を進めています。

○常設部会として、国語等十二部会を開設し、その他は原則として休部とする。

○休部扱いとしている部会については、三教研夏季研修会での提案の準備等、必要に応じて開設し活動を行う。

○各校の授業研究会や学校訪問等、公開可能な授業や研修の予定を他校に公開し、研修の一コマとして活用できるようにする。

今年度で再編四年目に入りました。今後も、子どもとじっくり向き合うための環境づくりを進めていきます。



学校訪問での授業公開 (設楽町立田口小学校にて)

(文責・原田 基寛)

教室の窓から

地域の施設を活用した 親子交通安全教室

豊川市立御津北部小学校

本校では、校区にあるタカラ自動車学校で四十年以上前から交通安全教室を行っています。今年度も四月に一、二年生で実施しました。教習所内のコースを實際に歩き、体験し、学ぶ機会はとても有難く、入学したばかりの一年生は保護者と一緒に交通ルールの基本を学び、二年生は昨年学んだことの復習をしました。職員の方から、「点滅信号は、もう信号が赤に変わるから渡つてはいけない」と教えてもらいました。急いで渡ればよいと思っていた子もあり、新たな学びがありました。また、コースを歩きながら、横断歩道で車から目立つように手を挙げたり、右・左・右をよく見て渡つたりと、親子で交通ルールを学びました。コース途中で停車車両があり、車の横を歩いているとドアがいきなり開きびっくりする場面もありました。停まっただけでも、いきなり動き出したりドアが開いたりすることもあり、車の近くを歩くときは気を付けなければいけないと学びました。最

後に、急ブレーキをかけたときの制動距離や人形を使った飛び出しの実験を見せてもらい、人形が車に轢かれて壊れてしまう様子を目の当たりにすることで、飛び出しの危険を強く感じました。

子どもの活動範囲が一気に広がる学年の始めに、交通安全を考えることは命を守ることに繋がります。この交通安全教室を継続して行うことで、本校の子どもの交通事故はほとんど起きていません。今年の三月、本校近くに新しくバイパスが開通し、交通量が以前よりも多くなりました。これからも今回学んだことを忘れずに、学校、家庭、地域の方々と協力して子どもたちが安心・安全に過ごせるよう努めていきたいと思えます。



横断歩道は手を挙げて

(文責・岸田 章世)

研究校 紹介

安心して活動に参加し、自分なりに「できた」と感じられる子の育成
〜大林スタイルによるインクルーシブな学校づくり〜

豊田市立大林小学校

一 はじめに

本校には、多様なニーズのある児童が在籍しています。そんな児童たちに、特別支援教育の視点を生かし、大林スタイルによるインクルーシブな学校づくりを研究テーマに決め、取り組んでいます。研究に際して、愛知教育大学小倉靖範氏にご指導・ご助言をいただきながら、三年目を迎えています。

二 研究内容

(一) 安心して活動に参加できるように

① 教室環境のユニバーサルデザイン
落ち着いて学習に臨むことができるように、教室環境の整備や、学び方に応じた学習スペースの確保を行っています。

② 人的環境のユニバーサルデザイン
児童同士の関わりを活発にするために、Hyper-QUやDLA等のアセスメントを行い、結果を学級づくりや生かしています。

(二) 自分なりに「できた」と感じられるために

① 学びの土台を整える

学習を支える学び(学びの土台)を整えるために、国立特別支援教育総合研究所が作成した「自閉症教育七つの

キーポイント」を取り入れました。この視点をもとに、新たに「通常の学級七つのキーポイント 大林style」を作成し、授業を行う中で、この視点の力を成長させたり、支えたりできるようにしています。

② 指導計画を整える

「できた」と実感できる場面を増やすために、六年間を見通して、スタートカリキュラムや、自由進度学習を見据えた個別最適な学び、総合的な学習の時間を中心とした協働的な学びができるように、指導計画を整えています。



「ここをよく見てね」

また、交流及び共同学習として、特別支援学級との関わりを計画的に取り入れたり、国際教室による先行・反復授業を設定したりしています。

三 おわりに

特別支援教育の視点を生かし、誰一人取り残すことのない大林小をめざして、今後も研究を継続していきます。

(文責・安藤 誌洋)

令和七年度 定期総会 報告

五月二十一日(水) 蒲郡市民会館

五月二十一日(水)、令和七年度三河教育研究会定期総会・教育講演会が、約九百名の会員と来賓の先生方のご臨席を得て、盛大に行われました。

定期総会では、まず本年度の役員が承認され、夏目貴司会長を中心とした新体制が発足しました。

夏目会長は挨拶の中で、三河教育研究会の歴史と理念について語りました。三教研という組織そのものが、三河の教師にとって「よき先輩」であり、その懐に飛び込み、学ぶ機会を得られる私たちは「熱き後輩」でありたいという思いを語られ、教師の自分である「学び続ける」姿勢で研修、自己研鑽を怠らず、「この子のため『勉める』」ことで子どもの成長を支える重要性を強調しました。

授業づくりでは、子どもの声や反応を丁寧を受け止め、そこから学びを深めることが大切であると語りました。先輩や仲間の知恵を受け継ぎながら、座席表を活用した指導のあり方や、子ども同士の学び合いを促す、小さくとも積み上げていく工夫の重さにふれました。さらに、教育の伝統は世代を超えて受け継がれ、教師が互いに研鑽に励むことで、質の高い教育が実現すると語りました。

まとめに、わが国の宮大工の技の継承に喩えて、三河教育の継承を強調し、「三

河のすべての子どもに質の高い教育を保證する」という創設時の理念を受け継ぎ、誇りをもって「勉める」べく、三教研の仲間間で力を合わせて取り組んでいこうと呼びかけました。

就任のあいさつに続き、ご臨席の来賓を代表し、蒲郡市副市長の贅年宏様からご祝辞をいただきました。

贅様からは、「こどもファースト」の理念のもと、蒲郡市の教育環境の整備、新設校の計画、理科教育の充実を紹介し、地域の子どもの未来を支える大切さをお話しいただきました。また、郷土愛を育む三河の教育活動の重要性を強調され、子どもたちの成長を支える環境づくりへの期待と、私たち三教研の仲間の努力を称えていただき、本会のさらなる発展を祈念するお言葉をいただきました。

ご祝辞ののち、前年度の活動にご尽力いただきました前会長の柴田昌一先生、前副会長の中神和也先生に感謝状を贈呈しました。

それに続き、令和六年度の事業報告・決算報告、令和七年度の事業計画案・予算案について、すべての議案が賛成多数で承認されました。

当日は、多くの皆様のご協力により、盛会裏に終えることができました。

教育講演会

演題 「子どもが生きる授業づくり」

講師 富山市教育委員会 教育長 宮口克志氏

富山市教育委員会教育長・宮口克志氏をお招きし「子どもが生きる授業づくり」をテーマに語っていただきました。宮口氏は、実践者としてのご自身の経験をもとに、子どもたちの主体的な学びを促す授業のあり方について具体的な事例を交えて説明してくださいました。

教育改善の必要性と社会の変化

まず、授業改善の必要性を感じたきっかけは「子どもの姿」であるとお話し

日本の教育の課題

日本の教育の問題点についてもふれられました。日本の子どもたちが問題解決型の学習を行っているにもかかわらず、概念理解や思考プロセスの表現力が不足し、学習への関心も低いという現状を、世界各国との比較によって示されました。その中で、特に次の三点が課題であるとされました。

- 問題解決を行っているのは教師と一部の子どものみである
- 多様な考え方が出ても、最終的に一つ



の解決策にまとめられてしまう
○協働学習が導入部分のみに限定されて
いる

これらの状況を改善するためには、「個別最適」や「協働的な学び」を具体化する
必要がある、教育関係者が積極的に取
り組まなければならないと述べられまし
た。

授業実践「対称な図形」

次に、実際の授業例として小学校六年
算数科の単元「対称な図形」を紹介され
ました。単なる教科書の内容ではなく、
「均整のとれた形」という設題を掲げ、
子どもたちが主体的に課題を設定し、探
究する学習の様子を紹介されました。授
業では、富士山の美しさ等について議論
が交わされ、「美しさとは何か」「均整と
は何か」という問いに対して、多角的な
視点で考察が進められていました。線対
称・点対称という数学的な条件を探ろう
とした児童、また、人が美しいと感じる
形の中に黄金比などの数理が潜んでいる
ことに気づいた児童などが、互いの立場
や考えを議論し合うことで学びを深める
契機となったとお話しされました。

子どもたちは「均整のとれた形」を学
ぶ中で既存の概念を超え、論理的な思考
によって、学びを深めていったことがわ
かりました。また、「寄り道の学習」の
重要性を強調し、教師の計画通りに進む
学習ではなく、子どもたちが主体的に問
いを深めながら学びを広げることの重要
性を語られました。

教師の役割と学び続ける姿勢

教師自身が学び続けることで、子ども
たちの探究心が育つと述べられました。
授業改善は特定の教師が行うものではな
く、学校全体で取り組むべきものであり、
すべての教員が同じ目標を共有すること
の重要性を語られました。さらに、教育
基本法や学校教育法の趣旨を踏まえた教
育が重要であり、教育の本質に基づく授
業実践が大切であるとして教授いただき
ました。

子どもたちの実践成果の紹介

講演の終盤では、子どもたちの作品や
運動の成果を提示し、探究学習を通じた
子どもたちの成長の様子を紹介してい
たきました。水彩画や鉄棒、マット運動
などの実践例を挙げながら、子どもたち
が主体的に学びを楽しむ姿から、学力だ
けでなく自己肯定感や成就感を育むこと
の重要性を述べられました。

講演の締めくくりとして、「教育の本
質は時代が変わっても変わらない」と述
べられ、教育の目的は学習指導要領に
よって変わるのではなく、子どもたちの
成長を支えることにあると強調されまし
た。探究学習や問題解決型学習、デジタ
ル活用などの手法はあくまでも教育の手
段であり、目的ではないということを通
べられました。そして、「お互いに情報
交換・情報共有をしながら、一歩ずつ歩
みを進めていきたい」というお言葉を残
され講演を終わられました。

令和七年度 本部事業 生きる力を育成する三河教育

～学び合い、学び続ける教員として～

総務委員会

本年度、創立六十五年目を迎えた三河
教育研究会（以下三教研と表記）は、常に、
子どもを中心に据え、生きてはたらく資
質・能力を育む教育活動を誠実に、また
積極的に追究してきました。

教員の指導力向上が叫ばれる昨今、三
河各地から集った会員が、子どもに確か
な学びをさせたいと切に願ひ、実践をも
ちより、互いにその成果や課題を共有し
合いながら、自身の指導力の向上に役立
てています。

三教研の強みは、各学校、地域で行っ
た授業実践のもとに、若手、中堅、ベテ
ランが、年代や立場を超えて共に切磋琢
磨し合う機会が確実に保障されているこ
とです。

本年度も、三教研の各部会・委員会の
研究大会、研修会において、魅力と実効
性のある研修活動を計画しています。ま
た、教育研究におけるミドルリーダー養
成のために、授業力養成講座を引き続き
開催します。ぜひ、ご参加いただき、学
びを地域や学校に還元していただきたく
存じます。

なお、三教研の取り組みや各学校で実
践された学習指導案などをウェブペー
ジや広報「教育 みかわ」を通して紹介・
共有していきます。会員の皆様からの情
報提供をお待ちしています。

アドレス： <https://www.sankyouden.jp/>

国語部会夏季研修会	8/1	高浜
国語部会書写実技講習会	7/25	岡崎
愛知県社会科教育研究大会	8/8	豊橋
算数数学部会夏季研修会	8/21	西尾
全国小学校理科研究協議会研究大会	11/20	名古屋
愛知県生活科教育研究大会	7/29	西尾
音楽部会夏季研修会	7/30	知立
造形部会夏季研修会	8/8	豊田
保健体育部会夏季研修会	8/8	幸田
技術・家庭部会夏季研修会	8/5	幸田
愛知県英語教育研究大会	11/5	豊田
道徳部会夏季研修会	8/8	蒲郡
特別活動部会夏季研修会	7/30	幸田
特別支援教育部会夏季研修会	8/1	蒲郡
養護部会夏季研修会	8/1	刈谷
総合的な学習部会夏季研修会	7/29	安城
ICT活用研究会	8/1	知立
愛知県学校図書館研究大会	8/8	稲沢
愛知県統計教育研究発表会・講演会	11/21	名古屋
愛知県生徒指導研究大会	11/11	豊田
愛知県放送教育特別研究大会	8/20	名古屋
愛知県学校視聴覚教育研究大会	10/17	江南
愛知県へき地・複式・ 小規模学校教育研究大会	10/31	北設
授業力養成講座Ⅰ（東三河①）	8/18	豊橋
授業力養成講座Ⅰ（西三河）	8/20	西尾
授業力養成講座Ⅰ（東三河②）	8/25	豊橋
授業力養成講座Ⅱ（西三河①）	10/15	西尾
授業力養成講座Ⅱ（西三河②）	11/5	碧南
授業力養成講座Ⅱ（東三河①）	11/6	豊橋
授業力養成講座Ⅱ（東三河②）	11/7	豊橋

教育随想

(97)

いきいきとした学校



新城市教育委員会
教育長

安形博

忘れてはいけな思っています。

「海老で鯛を釣る」という言葉があります。歓声を上げながら遊ぶ子どもたちの姿を見て、遊びで釣れるものを考えてみました。自主性。主体性。社会性。創造性。感性。友情。けんか。解決力。対話力。体力。実にいろいろな釣果（ちようか）があります。しかし、遊びの最大の釣果は、心底楽しむことそのものではないでしょうか。

先日、ある小学校に行ったときのことです。児童玄関で、何十人もの子どもたちが息を潜めてじっとしていました。何が起ころのかと思つて様子をかがっているとチャイムが鳴りました。その瞬間、子どもたちが蜘蛛の子を散らすように外に駆け出していききました。

その学校では、授業終了のチャイムが鳴るまでは、外に出て遊んではいけないことになっていたので。子どもたちは、それほどまでに『遊びの時間』を待ち遠しく思っているのです。大人は、知らず知らずのうちに子どもたちの感覚を忘れてしまふものですが、子どももいつしよに過ごすことを生業にしている教師だけは、子どもたちの「遊びたい」という体の内から湧き上がる感覚を

子どもたちが、毎日通う学校だからこそ、学校には楽しみがあるべきです。朝、学校に向かう子どもたちの心をのぞいたとき、「今日も遊びたい」「今日も友達と遊ぶぞ」という思いがあり、学校に近づくにつれ、友達と遊ぶ時間が楽しみで楽しみで我慢しきれなくなり、自然に小走りになって校門をくぐるのが子ども本来の姿です。こんな姿が見られれば、『いきいきとした学校』の第一ステージクリアです。

実際、遊びに夢中になってくると、子ども同士、意外と汚い言葉の応酬が始まります。「どいかん」「ど怒れる」「どずるい」「ど卑怯」。でも、これがいい。子どもが本音で思つたことを言い合えるのは、遊びの世界しかありません。教室には先生が、家には親がいます。汚い言

葉や悪口を言えば、大人に叱られます。子どもたちだけの世界なら、誰にも付度せずと思つたことを思つたまま自由に表現できます。遊びの中で、けんかをしたり、悪口を言い合ったり、自分勝手な通用しなかつたり、卑怯だと非難されたりする経験を、小学校低学年のうちから山ほど積み上げておけばいいのです。裏を返せば、子どもたちが十分に遊んでいないから、コミュニケーションがうまくとれなかつたり、つまずいたときに立ち上がれなかつたりする子どもが増えているのではないのでしょうか。

不思議なことに、遊びに夢中になることのおもしろさを知つた子どもは、対象が遊び以外のことでも夢中になるものです。遊びをとおして人と本音でかわれるようになった子どもは、授業でも本音でかわることが当たり前になってきます。自分たちだけの力で遊び続けられる子どもたちは、自分たちだけの力で学び続けられます。そして、最も大切なのは、これらのことが心地よいものだと義務教育の九年間、体感し続けることです。子どもに染みついた心地よさの感覚は、当然のことながら不登校やひきこもりを引き起こしにくくします。

新聞紙上で毎年見る『不登校何十万人』『不登校児童生徒数過去最多』の見出し。罪のない子どもを苦しませることこそ大罪です。猛省しなければならぬのは、私たち大人です。『遊びの時間』を、息を潜めてじっと

待つ子どもたちが、学校の本来の魅力が何であるかを語っています。

編集後記



三河教育研究会定期総会・教育講演会講師の宮口克志様が自らの授業実践を紹介されながら、学び続ける教師、考え続ける教師でありたいことを語られました。そこには、学ぶことを楽しむ子どもを育てたい、生涯学び続ける人間になってほしいという、熱き願いが込められていました。

本年度の三教研の各部会・委員会の研修会・研究会、並びに授業力養成講座が、技を磨き合う、学び合う、発信・交流の場となり、いきいきと学ぶ三河の子どもたちが増えていくことを期待してやみません。

多用の中、原稿をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。

表紙の写真

「新しいデザインの制服もいいね！」

ようこそ、風中へ!!

撮影 新城市立鳳来中学校

山田 久美子 教諭